現代の国語「水の東西」

6時間扱い

単元の目標

◎対比構造や類比構造に着目し、文章展開を理解することができる。
〇筆者の主張に適した具体例を、自分の体験や知見から論述できる。

評価規準

知識・技能	言葉の特徴や使い方に関する事項(オ) 文、話、文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解すること。
思考・判断・表現	書くこと(ウ) 自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文章の種類や文体、語句など表現の仕方を工夫すること。
主体的に学習に取り組む態度	文、文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解しようとし、自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考え、文章の種類や文体、語句など表現の仕方を工夫しようとしている。

知識・技能	対比や類比、因果関係など基本的な論理構造を本文の中に適応させて理解に応用することができている。
思考・判断・表現	①教材の主張に合わせて適切な具体例や新たな考えを展開できる。

単元の流れ

次	時	主な学習活動
一	1	今までに学んだ範囲の論説文の構成を読み解く。
二	2	前時に学んだ論理構造の知識を本文で適応する。
	3	筆者が本文で行っている工夫に気づき、効果を推測する。
	4	本文の筆者の主張につながる具体例を論述する。
三	5	文化比較という視点から600字程度のエッセイを書く。
	6	グループや全体で共有して好例の特徴をとらえる

授業づくりのポイント

単元で育てたい資質能力

本単元のねらいは、論理的な思考を展開する際に必須となる、三つの主な論理構造について学ぶことで、より的確な文章理解を行う力を育むことである。そのために、本文の対比構造や、それぞれのキーワードがどちらの類比にあたるのかなど、今までの説明的文章を読むよりもさらに俯瞰的な視野を持つ必要が出てくる。

具体例
冒頭の「鹿おどし」が登場する意図、意味段落それぞれに配置される対比的表現など、一読しただけでも、この文章全体の趣旨に迫ることが可能な構成となっている。部分によっては理解が難しい部分もあるが、それは「内容理解」が難しいのであって「構成理解」が難しいのではない。教師側はその区分けに留意して授業に向かいたい。

教材・素材の特徴

「水の東西」は、鹿おどしや噴水といった具体的な造形物を引き出しながら、日本と欧米の文化比較について述べた論説文である。最終的には「行雲流水」という日本独特の思想を引き出し、鹿おどしという具体的な造形物を、目に見えぬものを味わうための究極的な装置なのだとする展開は、クラシックながらもエクストリームな内容となっている。最近では、中学校の段階で文化比較論が多く掲載されているので、その集大成として扱うこともできる、汎用性の高い文章である。

具体例
対比のねらいを実感させるにはこの上ない文章である。くわえて発展性のあるテーマなので、他の短めの文章を読ませて、さらに考えさせるという単元展開も考えられる。構成の面で語られがちな本文だが、実は表現技法の巧みさ、特に明確には語り得ないものへの比喩的な表現は特筆すべきものがある。そこに焦点をあてた単元活動があってもよいと思っている。

言語活動の工夫

典型的な対比的文章なので、シンキングツールを使った読み取りをするのに適していると言える。二次の冒頭において、本文を範読したあとにシンキングツールを個人で記入させ、何がどういうグループに分類されているかを相互確認させていく活動も有効であろう。これは人によって異なるといった質の活動ではないので、教師側から即座に分類パターンを示して、自分と比較させるに留める程度でよい。
三次の活動は、大体が日本と欧米の習慣の違いにフォーカスがあたるものと思われる。水の東西自体は日本人の持つ「不可視的なものをどう知覚するかの代替感覚」がテーマなのだと思われるが、さまざまな習慣の切り口から、東西比較は可能であろう。そういった差異のすべてに論理的な因果を説明できるわけではもちろんないが、生徒自身が仮説をたて、それに類する事例を挙げることそのものにこの活動は意味がある。

水の東西(6／6)

本時の目標

①ある一定のねらいをもって、論理的な文章を記述できる。
②ある観点に基づき、他者の文章を段階的に評することができる。

本時の具体的評価づけ

①ルーブリック評価表に基づいて、自分の文章を評価づけられる。
②ルーブリック評価表を参考に、他者の文章の構成について評価づけられる。

授業の流れ

1　4人のグループで個人の文章をそれぞれ論評していく。(25分)

ケース❶
T　:はい、それでは4人1組となって論評をしていきましょう。
T　:1人の文章を全員で読みます。読み終わったら、右手前の人が司会をします。
T　:ルーブリック評価表を見てください。この指標を参考にして論評します。
T　:各項目の評価の理由を文中の表現や構成から述べられるようにしましょう。
T　:たしかに変化していますね。大きな変化です。

通常であれば回し読みというスタイルになるかも知れないが、1人の書いた文章を、グループ全員が同時に読み、同時に論じていくという体験が趣旨である。さらになんとなく、ではなく、そのような評価にした理由を述べなければならないことで自然と話題は文章の中の　展開の構成や例示の妥当性、主張の一貫性へと話が移る。それを補助するのが、ルーブリック評価表である。
前時の執筆の段階でルーブリック評価表は配布されており、生徒はこの表を手元にしながら、構成や例示を考えていったはずである。そして他者評価をするにあたり、自分が記述する際に参考にした評価表をもとにすることで、より自分の文章と他者の文章を客観的に比較することが可能となると考えられる。

水の東西(6／6)

2　グループ代表を選出し、その中から三作を全員で共有する。(20分)

グループの代表として選定する場合、評価づけの最高点が選出されるのがベターであるが、今回は特に「例示の妥当性」を重点的に評価してほしいことを告げる。

ケース❶
T　:ルーブリック評価表によると、四つの観点で評価づけられています
T　:今回は「例示の妥当性」、わかりやすい例示であったかを重点で見てください。
T　:もちろん、4観点ともAという場合は無条件でそれが代表になります。

ケース❷
T　:代表者の中から三人を選び、文章を読んでもらいます。
T　:その際、優れている点を書き出してみてください。

他者の作品に対して、優れている点を挙げられるということは重要である。改善点を挙げられるというのももちろん好ましいことだが、相互評価を行ったり、グループ活動を主軸に置く場合は、「否定されない空間づくり」が大前提である。そうすることで、表現する場合にものびのびと表現できるし、評価する場合にも自分の判断をもって評価することができる。

ルーブリック評価表は自己評価や他者評価を行う際のある種のものさしであるが、それ以上はない。どこに着眼し、どこを理解するかで、観点は同じであれ、評価した結果は自ずと変わってくる。重要なのは、その着眼点や理解部分を、他者と共有していくことができるかどうかということだ。決してルーブリック評価表は教師側が生徒を採点するためのメジャーではない。

ルーブリック評価の問題に関してはまた後述に控える。

0　ドキュメントを共有する

令和2年度のGIGAスクール構想に伴い、タブレットPCと同時に公立学校で急速に普及したサービスがGsuitesである。Googleアカウントを持っていれば、誰もが同じファイルを共有して閲覧したり、共同で編集したりできるようになった。さらにGoogle jamboardのように、協議に活かすなども考えられる。Jamboard自体は少し使いづらさがあるが、もう少し経てば、もっと利便性の高いサービスが付与されることが予想される。
今のところは、生徒の作品をコピー機のスキャナーで読み込み、それをGoogleDriveの共有機能を使い、読み合いに活用する、といったような活動が第一歩となるだろう。今までは生徒の作品は集めた後に教師側がワープロで打ち替えたり、印刷をする手間があった。しかし現在では、表現物をそのままデータとして同時的に閲覧・編集できるようになった。それは非常に大きい変化である。